

しましたことが凡て杞憂であつたと思ひます。唯此の僅か半年間の幼稚園に就ての私の觀察では保育の方針など人に依つて随分意見を異にして居るやうにも考へられますが、どの幼稚園に居ります

子供でも私共の子供が幸福に日々を過して居りますやうに幸福でありたいものと祈つて居ります。入園以來の感謝と満足とを述べます序でに思つて居りますことを書き添へました。

## 子供の世界

水島 きゆり

一

マコちゃんのお母さんが、箆笥から着物を出さうとしましたが、マコちゃん所有の大型自動車が邪魔をしてゐるので、引出を引出すことが出来ません。

「マコちゃん、自動車をそつちへ持つていらつしやいな。」

マコちゃんはつい今しがた床の中から起出して来たばかりなので、むつつりして立つたまゝ動かうともしません。お母さんは一度も、

「マコちゃん、自動車を子供部屋へ持つていらつしやいな。」

とおつしやいました。マコちゃんは聞えたのか、聞えないのか、だまりこくつてゐます。

「マコちゃん、お早う。」

と言つて、其處へ顔を出した私は、

「おや、マコちゃんの大型自動車ですね、どうしたんです、ゆふべ車庫へはいらなかつたんですか。」

かう言ふと、マコちゃんの顔一面に、うすく喜びの色が動き出しました。私は小首を少しかしげながら、

「こんな重い自動車は、マコちゃんにはとても持つていかれませんねえ。」と申しました。

マコちゃんは忽ち、うんと力を入れて自動車を持上げ、さもく重さうにエンヤラクくと運んでいきました。

私「マコちゃん、今日は此の自動車で誰が乗るんです、ポビー君（人形の名、腕を怪我して人形病院にはいり、一昨日退院した。）ですか。」

マコ「さう。ポビーは病院から歸つてまだ此の自

動車に一度も乗らないからね。」

私「ちや今日はポビー君のお祝に、皆を自動車で乗せて何かするんでせう。」

マコ「うん、今日はね旗行列するんだ。」

私「いゝねえ、赤ちやん達（マコちゃんの人形の總稱）は大喜びね。ほら、チビ君もマリーさんも南洋の土人も皆ニコくしてゐますよ。」

マコちゃんは歡呼の聲をあげて、二三度跳ねました。さつきからマコちゃんに朝御飯を食べさせようとして待つてゐるをばあさんが、茶の間から二言三言おつしやつたが、マコちゃんの耳にははいらぬらしい。

「マコちゃん、赤ちやん達が待つてますよ。早くお顔を洗つて、御飯をたべて。」

私の言葉が終らないうちに「うん。」と元氣よく返辭をしたマコちゃんは、湯殿へ飛んで行つて、

「お母さん、顔を洗ふよ。」

マコちゃんは今五つです。私とマコちゃんとはお隣どうしで、二人は無二の親友です。

## 二

「ケンちゃん、御飯ですよ。」

お母さんが幾度お呼びになつても、ケンちゃんは兵隊あそびに夢中で、おもちやの兵隊さん達から離れようとはしません。

「いゝ兒だねえ、早くお出で。」

「おいしいものがあるよ、早く来てごらん。」

何とおつしやつても、ケンちゃんはふりむいても見ません。ケンちゃんのお姉さんが不意に、

「トラ、トラター、チテチテター。」

と聲をたて、

「ケンちゃん、ほら三聯隊でもお晝御飯ですよ。」

ケンちゃんともお晝でせう 喇叭がなりますよ。

トテトテター、チテチテター。」

ケンちゃんはすぐさま止めて、すばやく膳に向

ひました。

こんな話を何かで讀んだ時、私はケンちゃんのお姉さんが好ましくて、心の底からほゝ笑の湧出るのを覺えました。

子供を喜びと輝きに満ちた「子供の世界」に活躍させることの出来る者は、單なるお母さんでもなく、單なる保母でもありません。唯其の親友となり得る者のみであります。

~~~~~

負ふた兒に教へ られて淺瀬る。